

事例から学ぶ領域「人間関係」の実践的試み —人間関係から学び続ける保育教諭の養成を目指して—

藤井 美津子

キーワード:人間関係、観察力、考察力、事例分析

1. 【はじめに】

少子化が進みながらも、待機児童の問題が年々深刻化している昨今、幼稚園や保育所等の施設や保育者の数の問題のみでなく、保育者の質の問題を問われることも多くなってきている。その質の問題は、保育者養成機関における学修にかかわる問題である。

領域「人間関係」のなかで、幼稚園教育要領・保育所保育指針が共通にねらいにしていることは、子どもたちが「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」(文部科学省、2008;厚生労働省、2008)ことであると謳っている。そのためにも、「人とかかわる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感を持つこと、更に、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる」(文部科学省、2008)特に「人生の初期に人への基本的信頼感が養われること」(厚生労働省、2008)の重要性を学生たちが学ぶ必要がある。

そのことを基盤に、乳幼児が、保育者や友だちと共に過ごすことの喜びを味わい、主体的に活動をするようになり、他者とぶつかったり、共感したりしながらかかわりを深め、試行錯誤しながら活動を展開する姿を、一人ひとりの子どもたちにおいて成長していくように保育することを、学生たちはこの「人間関係」の領域において学んでいかななくてはならない。

2. 【目的】

本学の子ども学科では、2年間の在学中に保育実習Ⅰ、Ⅱ、幼稚園実習、施設実習等で実践的に学びを深め資格取得を目指し、秋学期には、就職活動も活発化し、希望する就職先の種別も明確になっている状況がうかがえる。

しかし、近年実習現場の声として、保育士・幼稚園教諭の職の選択者が減少していること、1年以内に離職する率が増えてきていること、様々な人間関係に悩み、園の保育理念や目標の理解の前に退職してしまうケースがあるという。

本学の普段の学生指導においても、自身の行動に対する目的や理由が明確でなかったり、物事に対してなかなか視野を広げられず、前向きな思考を見いだせない学生も少なくない。

そこで2年次36名が秋学期に取り組む「人間関係」の授業において、それぞれが学んできた多種多様の保育内容と方法を共有し「人との関わりの中でどのように育っていくのか」ということに対し理解を深め、「人と関わる保育という仕事の魅力」を再確認していきたいと考えた。そして、これから出会う子ども達をはじめとした様々な人間関係の中で学び続ける保育者の養成を目指して実施した。

3. 【方法】

保育内容「人間関係」において、保育者に必要な「観察力」「考察力」を向上させるために、学生たちに、子どもたちが様々な人との関係を体験している事例や保育に対する思いと、その時の保育者の援助や行動について話し合い、学んだことを自由に記述していった。

いくつかの実習を体験している2年次秋学期の学生たちは、授業を聞きながら、園の中で子ども同士の様子や、保育者と子どもの様子をイメージしやすくなっている。そのイメージをさらに深めて理解しやすくするために、どの章にもふんだんに事例が載せられている「体験する・調べる・考える 領域人間関係」(田宮緑 萌文書林 2013)を教科書として使用した。この教科書は、ホップ・ステップ・ジャンプと段階的に書かれている。

ホップでは「なぜ、人とかがかわることが大切なのか」という問いからスタートし、いくつかのエクササイズに取り組みながら、自己理解を深め、子どもの頃の対人関係図をもとに人的環境や、社会や文化といった背景を考慮することの必要を解説してから、乳幼児、3歳児、4歳児、5歳児、特別な支援を必要とする子どもなど、それぞれの発達段階の特徴的な一事例をもとに、対象児の人とのかかわりがどのように育っていくかを時系列でみていく。その後保育者として周囲の大人とどのようにかかわったらよいのか、保護者とのかかわり、保育者同士のかかわりについて、事例やエクササイズを通して学んでいく。

ジャンプでは、子どもたちのかかわりの育ちをどのように見たらよいのか、見えないものを「みる」ために、私たちに必要なことは何なのか。エクササイズや小説をもとに考えていく。最後は、保育者として人として、何を大切に生きてゆけばよいのか、永遠のテーマを投げかけている。

全編を通して、絵本や小説、エッセイが随所に引用され、イラストや図を用いて、学生に本文の意図が伝わりやすいようになっている。シラバスにおいては、この教科書を中心に、その他視聴覚教材 DVD 「3年間の保育記録」も使用している。

保育現場においては、子どもの発達を的確に把握したり、子どもと他者間で起こっていることや実態を的確に捉えることが重要である。その力は「観察力」といえる。その上に、子どもの行為の背景にある意味や思いをどのように捉えていくかという「考察力」、自分のかかわりがどうであったかを考える「内省力」が大切とされている。

授業ではそれらの点に力をいれ、講義形式や映像を見たり、事例を読んだ自分の考えの記述、事例の分析、話し合い等を入れて15回の授業に取り組んだ。

4. 【結果及び考察】

1. 乳児の保育所における人とかかわり(0.1.2歳児) 教科書の事例 Lecture5より

母親の育児休業が終了し、保育所に入所することになった1歳児のカナの保育所における人とかかわりを、保育者が記入した連絡ノートを通して見ていく。

この事例は、保護者と園をつなぐために、送迎時の対話や園内の掲示と並んで、保育の内容や子どもの様子などを知らせるために連絡ノートの重要性を知らせている。言葉で思いや状況を伝えることが難しい乳児にとっては、保育者が園での子どもの思いや状況を読み取り保護者に伝える重要

なツールとなる。又、保護者も自分の知らない子どもの姿を知ること、園への信頼関係を深めたり、家庭における支援で必要なことを考えたりすることができる。

ここで扱う連絡ノートは、満1歳を迎えるカナの保育所入園から約1年間に複数の保育者が記述したもので、カナと人とのかかわりに関する記録を中心に抽出され、乳児の保育所における人との関わりを事例を通して考えていった。アタッチメントの形成、コミュニケーションが図れた嬉しさ、保育者が安全基地の様子、自我の芽生えの様子を肯定的に知らせたもの等、温かな連絡ノートのやり取りを学生たちも経験してきたことを思い出しながら学ぶことができた。

2歳児近くになり「自分で」と大人と同じようにやりたがる時期が来る。自己主張も徐々に激しくなる子どもの発達段階を理解しながら援助をしていく必要がある。そこで、ここで例題を出し、現場を想像して連絡ノート書いてもらい、話し合いの材料にした。

例題 1・・・こうちゃんは2歳児ひよこ組 4月からぶんぶん保育園に入園しました。当初なかなか園に慣れなかったこうちゃんも、ようやく好きなお友だちもできたみたいです。ところが、ここ何日かひっかき傷や時には歯型が付いていたりします。お迎えの時先生からは何の話もありません。母親は心配して先生に相談しました。担任の先生は「こうちゃんは人気者でみんなから好かれています。だから遊びのときみんながこうちゃんを取り合うんですよ。・・・・・・」「はぁ・・・・・・」母親は納得できません。

さて、あなたが担任の先生なら、どのように連絡ノートに記入しますか？ 現場を想像して書いてみましょう。

A 学生

7月8日(水)

今日はお母さんがこうちゃんのことと心配して相談してくださりありがとうございました。お話をゆっくりできなくてすみませんでした。

最近のこうちゃんは、言葉もたくさん話すようになり、友だちとの関わりも沢山ふえ、保育者だけでなく友だちといることへの安心も生まれ、みんなと一緒に遊ぶ場を共有しながら楽しんでいる姿もあります!!

その中で、言葉で伝えながらもまだ玩具の貸し借りでは、言葉で伝える前に気持ちが先走り、お互い手が出てしまう姿もあります。出来るだけ、手が出る前には保育者が間に入るようにしています。今は「かして」「いいよ」と伝えられるよう、保育者が代弁しながら関わっています。こうちゃんも最近「かして」と友だちに伝えています。ひっかき傷や歯型の事でお母さんに不安にさせてしまったのは保育者のお伝え不足でした。本当にすみませんでした。お母さんにこうちゃんの成長や最近の姿を伝えていけるようがんばります!!

今日は声を掛けて下さり本当にありがとうございました。またいつでも何でも気軽に声をかけください。

B 学生

○月○日(曜日)

今日もこうちゃんは、○ちゃん○くんと一緒に積み木で遊んでいました。最近では○ちゃん○くんと一緒に外でも遊ぶ姿が見られます。まだ、自分の気持ちを伝えることが子ども同士では難しいため、人気の積み木を取り合ってしまった。その際保育者が気付いて間に入りましたが、こうちゃんには手にひっかき傷が出来てしまいました。冷やして消毒をしています。すみませんでした。その後○ちゃん○くんと自分の気持ちを伝え合い、上手に「貸して」と言えました。すごいです!! こうちゃんも嬉しそうでした。

○月○日(曜日)

今日のこうちゃんはお外にお散歩に行くことを朝から楽しみにしていました。早くお散歩に行きたくてうずうず。靴をはく際に待ちきれず、お友だちと履く場所が重なってしまいました。その際お互いに手が出てしまい、お友だちがこうちゃんの腕を噛んでしまいました。すぐに冷やしましたが、まだ歯型が残っています。すみませんでした。お友だちもその後こうちゃんを心配して「ごめんね」と言った際、こうちゃんは「いいよ」と言ってくれました。保育者が「こうちゃんえらいね」と伝えるとにっこり笑顔を見せてくれました。お家で痛がるようでしたら、お知らせください。

C 学生

今朝はお忙しい中来ていただきありがとうございます。

今日一日こうちゃんの様子をいつも以上にしっかり見るようにしていました。

なかなか園に慣れなかったこうちゃんもようやく好きなお友だちもできてきました。その中でトラブルになる事も当然あり、些細なことでけんかになってしまうことが多々ありました。けんかをするとすることは、自己主張ができるようになったということで発達段階上良い姿ですが、自分が嫌だと感じたら言葉で伝えるより先に手が出てしまうようです。

子どもたちには、自分の気持ちを言葉で伝えられるように私たち保育者も援助しながら見守っていききたいと思います。心配をおかけして申し訳ありませんでした。

D 学生

先日は、お忙しい中お話をいただきありがとうございます。少ししかお話しできず申し訳ありませんでした。

2歳児クラスになりこうちゃんもようやく園に慣れてきたみたいで、友だちと関わる様子がよく見られるようになりました。2歳児になり言葉も増えてきましたが、まだ上手に言葉が出てこない子もいます。中には言葉が上手く伝わらずに手を出してしまったり噛んでしまったりする子どももいます。私たち保育者はできるだけそのような事がないように子どもたちの様子を見守っていますが、防ぐことが出来ないこともあります。本当に申し訳ございません。

これからも、よりしっかり怪我のないように子ども達を見守り援助していきたいと思っております。本当に申し訳ありませんでした。

お母さんからお話をいただき、私たち保育者の考え方を見直すことができました。これからも何かありましたら遠慮なくお話しいただけたら嬉しいです。

E 学生

だんだん園生活にも慣れてきて好きなお友だちもでき毎日を楽しく過ごしています。朝はお忙しい時間にこうちゃんの怪我についてお話し頂きありがとうございます。お母さんに詳しく話す事ができず不安な気持ちにさせてしまい申し訳ありませんでした。

今日一日、一段とこうちゃんの様子を見ていた所、仲の良いお友だちと遊んでいる時に、人気者のこうちゃんを取り合う姿が見られ、お友だちの歯が当たってしまい、歯の痕が残っていたので冷やし様子を見る処置をしました。今後はより一段と様子を見て、お母さんが安心できるように頑張ります。また気づいたことがあれば何でもお話ししたいです。

F 学生

今朝はお仕事前のお忙しい時間帯にもかかわらずお話ししてくださりありがとうございます。また、十分にこうちゃんのことを連絡できずに申し訳ありませんでした。今日はあいにくの雨だったのでお部屋でおもちゃを出して遊びました。こうちゃんはS君と一緒に大好きな赤い車のおもちゃを走らせて楽しんでいました。

しかし途中、K君がこうちゃんと遊びたがり誘うのですが、思うようにいかず、言葉よりも先にこうちゃんの右腕を噛んでしまいました。すぐに洗い流した後、冷やして様子を見ました。これからも様子を見守り代弁しながら、少しずつ伝えられるようにかかわっていきこうと思いません。また何かありましたらお話聞かせてください。よろしくお祈いします。

例題 2・・・今度は母親の立場に立って先生に連絡ノートを書いてみましょう。

先生から(自分が書いた内容)の連絡ノートがきました。母親は納得できたでしょうか?
逆の立場に立ったとき、愛するわが子を守る気持ちになって書いてみましょう。

母親の返事 G 学生

今朝、お話を聞いて頂きありがとうございました。喧嘩が起こってしまうことは仕方ないことで、先生が気をつけて見てくださっていることは伝わりました。しっかり見てくださり、ありがとうございます。しかし、あんまり怪我が多い姿を見ていると、こうちゃんは嫌な思いをしていないか、相手の子を傷つけていないか不安になります。こういったことがあったら、しっかり伝えてくださると嬉しいです。

これからもよろしくお祈いします。

母親の返事 H 学生

こちらこそ、お忙しい時間帯であるのに話を聞いてくださりありがとうございました。家での様子を見ていても言葉が少しずつ増えているように思います。これも先生の見守りやお声かけのおかげです。いつもありがとうございます。

今日も K 君に噛まれた後も適切な処置をしてもらってとてもありがたいのですが、K 君は結構頻繁にこうちゃんを噛んでいるのでしょうか。また、お話させていただきます。今朝は本当にありがとうございました。

母親の返事 I 学生

今朝は聞いていただいてありがとうございました。

こうは最近、お友だちの名前を呼んでいて、言葉をたくさん覚えているんだと思い、成長を感じられました。私にも「かして」と伝えてくれることがあり、先生が言葉を掛けてくださっているおかげだと思いました。ありがとうございます。

こうが「先生、ひやしてくれた」と怪我のことを話していたので、私は、この怪我を冷やして痕が残らないようにしています。また、怪我の処置のことでお話し聞いてもらいたいです。また、怪我をするようなことがあれば、連絡ノートに書いて教えてほしいです。

先生、このことありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

*母親の返事 J 学生

子ども同士の遊びということなので、親がでていくのもどうかと思うのですが、さすがに歯がたの跡には驚いてしまいました。その子とは仲が悪いのですか？ その子の親は友だちを噛んだことを知っているのですか？ 送り迎えの時に会えることのあるのでどの子が教えてもらうことはできますか？ 1 回限りなら仕方ないにしてもここ何日かだと本当に仲が悪いのかなと思ってしまいます。人気者でなくていいから、安心して預けられるようにお願いしたいです。

例題 3・・・母親の返事 上記 J 学生の書いた母親からの連絡ノートをもとに 前回の続きを書く先生からのお便りに対して、このような返事が書かれていました。さあ、あなたならどのように対応しますか？

★考えられる対応策を話し合い、いくつか書き出す。（数人のグループで話し合う）

- * 主任・園長に報告する。
- * 怪我をした日付、怪我の箇所、どうやって怪我をしたのか等 記録するノートをとる。
- * 園全体で話し合う。（噛んだ子、噛まれた子の名前を保護者に伝えるか、どのように伝えるか、電話か連絡ノートか、また家庭訪問や園訪問をしていただくことも話し合う。）

- * 保護者に園に来てもらい、怪我の記録を必要箇所だけ見せて説明、謝罪する。このときは園長や主任にも同席してもらう。
- * こうちゃんと友だちの普段の様子を細かく記録しておく。
- * 噛んでしまった子どもの親には事実を伝えていることを知らせる。
- * 同じクラスのベテラン保育士さんや、学年主任の先生に相談する。
- * 歯型がついた日の迎え時に担任と保護者で話す。どうしてこういう状況が生まれたのか、年齢によって子どもの特性や集まり方、クラスの様子などを正直に話す但不安にならないようにする。
- * 友だちを噛んだという事は伝えるが、どの子を噛んだかまでは職員で相談してからする。噛んだ側への親への対応を考える。
- * 両方の親の性格など熟知して大丈夫そうなら上司の先生と担任同席のもと伝える。
- * 持ち上がりなどずっとその子どもとの仲が心配なので、今後も続けて何でも話せる様な関係を作っていく。

例題 4・・・例題 3 の J 学生の書いた母親からの連絡ノートで、上記のようにグループで話し合いをした後に、先生の立場で再び母親に出した連絡ノート

K 学生

お返事ありがとうございました。

子ども同士の遊びを見守る中、トラブルに対応することができず歯型の痕が続いてしまい申し訳ございませんでした。こうちゃんと仲が悪いわけではなく、いつも仲良く遊んでいます。でも、言葉より先に手が出てしまうことがあり、お名前は私からお伝えすることはできないのですが、相手のお友だちにこうちゃんを噛んだことをお伝えしています。

L 学生

不安な気持ちにさせてしまいすみませんでした。

こうちゃんが初めて噛まれた時に詳しくお伝えすることが出来ていなくてこの様な事が数回続き申し訳ございませんでした。園では怪我の記録を記したノートがあります。園長からの許可を得ましたので、もしお時間を少し頂ける時に園に来て頂いてノートの必要箇所をお見せして詳しくご説明させて頂ければと考えています。

噛んだ子どもさんとは決して仲が悪いわけではありません。その点も含めてゆっくりお話しさせて頂ければありがたいと思っています。ご連絡をお待ちしています。

どうぞよろしくお願ひします。

M 学生

先日は噛まれた日に詳しくお伝えできず申し訳ありませんでした。

また、お迎えの時に詳しい状況をお話しさせて頂きますが、今後もお友だち同士の様子についてしっかり見させて頂きたいと思ひます。また、少しでも気になる点があれば、お話しただければと思ひます。(対面対応を重視しているため、手紙では最低限の文言にとどめています。)

- この課題では、自我が芽生え自己主張が激しくなってきた2歳児でおきたトラブルを例題に、連絡ノートのやり取りを学修した。実習を経験した学生たちは、イメージを膨らませて、感情豊かに連絡ノートを綴っていた。

まず、問題が起きた子どものクラスの担任として連絡ノートを書き入れた。学生A～Fのように、仕事に行く前のあわただしい時間帯に、母親が心配して相談に来てくれたことに対して好意的に捉え返事をしている。また、普段の子どもの様子や、成長した点を上げ、母親の心配に共感しながらも安心できる材料を書き込んでいる。怪我に対してどのように対応したか、その後の様子も加えることで、母親と信頼関係を築いていきたいという思いが伝わってくる。

次に、噛まれた子どもの母親の立場になって、自分が書いた連絡ノートに対する返事を書いてみる。学生G～Iのように、普段の保育に対する先生への感謝や家庭で見られる成長や今回のことに対して理解してもらったお礼を綴っている。その中でもほとんどの学生が書き加えていたのは、トラブルや怪我があったら必ず知らせしてほしいということであった。母親の立場になったとき、強く感じたのだろう。

そこで学生Jの書いた連絡ノートの内容を伝え、グループで話し合う材料にした。他の学生たちの記述と違い、かなり辛辣で厳しい。この様な保護者もいることを十分想定して、様々な対応をグループで話し合った。相手の子どもの名前やその保護者に対する対応、噛んだ子と噛まれた子の普段の遊びの様子など、今まで自分ひとりでは気づかなかった事が、話し合うことで視野が広がり、園長や主任、家庭訪問や怪我の記録など意見が飛び交い学生の大きな学びの場となった。

話し合い後、学生Jの書いた連絡ノートのお母さんに対する返事が学生K～Mである。まず連絡不十分なことや、自分の至らなさをしっかり謝罪している。どの学生も前回よりその点が大きく違った。また、相手の子どもに対して、どうしたら良いのかという点も考慮されている。園の方針や職員間で話し合うなど、一人の問題ではないという事も感じたようだ。また同時に、文章で伝えることの難しさも痛感した今回の取り組みであった。

2. 3歳児の事例、教科書「3歳児 保育者が居場所」—ものを欲張ることに意味がある—では、新入園児のミズホが保育者と信頼関係を築き、自分の力で行動していく過程を、担任保育者のエピソード記録を通して学んでいく。

また、DVD「3年間の保育記録」からは、3歳児編前・後半①よりどころを求めて ②やりたい、でもできないを視聴して、リョウガ君と保育者との出会いと関わりを探った。

教科書の事例 Lecture6 ミズホの記録より

学生の学びの記述

- ・ミズホの砂場あそびのエピソードから、保育者はただ子どもと一緒に遊び関わるだけでなく、「今」を意味あるものとして生きられるように、子ども自身全てを(思いや行動を)受け入れかかわることで子どもの遊びは充実し、生活も充実してくるし、そういうことから自己実現できるようになるのかなと思った。そうなるためにも心身の安全や安定など基本的欲求を満たしていきながら関わっていきたいと思う。

学生の学びの記述

- ・3歳児のミズホの事例で、5月中旬、保育者が声をかけてもにこりとしなかったミズホが、6月中旬、ミズホと保育者が砂場であそんで初めてじっくりかかわったときに、ミズホがにこりと笑ったところが心に残った。遊びに加わっていても、時間と場所をともにしていただけで、子どもの思いが何もわかっていなかった場面は私にもあった。子どものありのままを受け入れ、一人ひとりのよさを認め、子どもの思いに共感することの大切さを改めて感じ、学んだ。
- ・ミズホの事例を見て、子どもが楽しみながら遊びに入ることのできるように、子どものありのままの姿を受け入れながら、一緒の時間をただ過ごすだけでなく本気で子どもと付き合うことの大切さを学んだ。一人ひとりのよさを、ありのままの姿を認めながら、思いをしっかり受け止めることが子どもとの信頼関係を築くうえでとても大切なことであり、まずは保育者との関係が必要だということを改めて気づいた。その子のこだわりや主体性を忘れずに大切にしていきながら、表面的に見るのではなく子どもの気持ちを十分に理解できるようにしていきたい。

DVD「3年間の保育記録」初めて幼稚園生活を始める3歳児リョウガの映像から

学生の学びの記述

- ・入園時にお母さんと離れられずに泣いているリョウガ君の姿が心に残っている。3月生まれで3歳になったばかり、初めての集団の場でとてもさみしく不安だったと思う。そのリョウガ君の気持ちを受け止めつつ、抱きしめる、抱っこするなどのスキンシップを取るなどを通して、信頼関係、愛着関係を築いているんだなと思い、改めて子どもと保育者の関係を築いていく事は本当に大切だなと思った。
- ・3歳児では、お母さんと離れられないリョウガ君がいたけれど、先生との信頼関係ができていくうちに先生を頼るようになっていった。先生に自分の思いを伝えることができたり、先生もリョウガ君の思いをちゃんと受け止めている姿があった。慣れない園生活を送るリョウガ君にとってお母さんのような存在の先生がとても重要な存在になることを学んだ。
- ・3歳児は初めての集団生活だから、ものを欲張る姿や初めて親以外の大人と気持ちを共有したり、友だちとつながることを知ったり、こだわりを持ってあそんだり、色々なことを学べる場面を、リョウガ君のDVDを見ることでより理解を深めることができた。

- ここでの課題は、ミズホと保育者がどのような過程を経て信頼関係を築いていくかということである。表面的に遊びを見ていたら、子どもの気持ちを理解することはできない。津守(1987)は、「子どもとの生活の中に投げ込まれているというのは、そこから逃れられないという受動性だけでなく、その中でおとなも人間として主体的に生きるという能動性が開かれていることを意味する。」と述べている。

子どもに寄り添うということは、保育者が自分の考えを捨てて子どもの思いに沿うということではない。保育者も主体的に生き、能動性を発揮していくことが求められている。

Lecture6の事例では、様々なミズホの行為から欲張る姿の背景にあるものは何かということ保育者は試行錯誤しながらミズホを通して学んでいく姿がある。

いくつかのエピソードから学生たちも「一人ひとりのよさを認める」「しっかり受け止めて信頼関係を築く」「表面的に見るのではなく、子どもの気持ちを十分に理解する」など、じっくり考える保育者の姿勢が書かれていた。

DVD「3年間の保育記録」からは、3歳児リョウガ君の変化、リョウガ君と先生の関係の変化を、前半・後半2回にわたって視聴し、その後話し合い感想を出し合った。前半のリョウガ君の言動、それに応じた保育者との相互交流場面について、事実と推測とを記述したり、その中から保育者のねらいと働きかけに気づくものもいた。後半の泣きわめくリョウガ君に保育者たちが、丁寧に応じていく様子に関心を持った学生が多かった。上記の学生の感想のように「子どもの気持ちに寄り添っていくことの大切さ」「受容の大切さ」を感じたという学生の感想が多く見られた。また、DVDでは、クラスの子どもたちが帰りの支度から、帰り会でも個別に対応している様子が映し出された。学生の感想からも泣きわめいていたリョウガ君が、保育者の対応によって次第に落ち着き、気持ちが切り替わっていくことを目の当たりにして、一人の子どもにとって保育者が丁寧に関わっていくことの意義や大切さについて考えた記述が多かった。また、実習の経験から、一人の子どもに対して応答的に働きかけていくことですら難しいのに、実際の保育場面では多くの子どもたちを平行して保育していくことの大変さを感じた者もいた。

3. 4歳児の事例、教科書「4歳児 自己主張と自己抑制」—幼児期のなかよしとは一では、仲間とのかかわりの中で葛藤する4歳児ユウタの自己形成過程を中心に、子どもたちが経験する葛藤や自己主張と自己抑制の姿や、友だちのよさや自分のよさに気づいていく姿を新任保育者の記録から学んでいく。

また、DVD「3年間の保育記録」からは、4歳児になったリョウガ君が、園にもなじみのびのびと振舞えるようになってきたが、特定の子どものとしか仲良くできず集団に馴染めない姿から保育者の援助のあり方を探っていた。

教科書の事例 Lecture7 ユウタの葛藤の記録より

学生の学びの記述

- ・4歳児ユウタのウルトラマンごっこの事例が心に残った。この事例から仲間関係が複雑になってきたことが読み取れた。かかわりが活発になったということで、相手のことがだんだんわかって、仲間内で遠慮がなくなったことも原因なのかもしれない。喧嘩をすることを通して、相手の気持ちを想像したり、自分の言動を振り返ったりする機会を設けることの大切さをこの事例から学んだ。相互交渉が自由に展開できる時間と場所を十分用意し、保育者がそれぞれの子どもの代弁者になることを行っていた保育者の姿は見習うべき点があると学んだ。
- ・仲間がいるという意識や複雑さ、自分の言動を振り返るなど、子どもたちの友だち関係の中でさまざまな気持ちに葛藤し、自己の表現へと向かっていく大切な時期だということを改めて学んだ。自分のやりたいことを見つけていながら自己を表現していくためには、本当の自分に気付くことが大切だということを知った。子どもたちがさまざまな友だちとの関わりの中から、自分のよさや友だちのよさなど相互に認め合うことができるように、保育者は友だち同士のかかわりをしっかり見守り、子どもの気持ちを代弁したり思いを受け止めることが大切だと思った。

DVD「3年間の保育記録」4歳児になったリョウガ君が様々な場面で葛藤する映像から

学生の学びの記述

- ・自分の気持ちを上手く言葉で表すことが出来ずにお弁当を食べなかったり、運動会に参加しなかったりなど反抗する行動で表現している所が心に残った。友だちの輪に入れない子どもに対する保育者の関わり方の工夫がたくさんみられ、なるほどなと思うことが沢山あった。無理して中に入れるのではなく、子どもの主張を尊重している保育を展開していく近くで支えること、遠くから見守る2つの視点が大切であると改めて実感した。
- ・4歳児では、自分から集団に入れなかったり、お弁当を食べないと宣言するリョウガ君の姿があった。こんな時も先生は否定したりせず受け止めてあげていた。また、集団でも上手く遊べるように先生が仲立ちとなったり、先生自らが子どもの集団の中に入ってあそぶ姿を見せたりしていた。この姿を見て、リョウガ君も砂場遊びに参加していた。子どもは、先生の姿を見ているので、先生が楽しむ姿勢が大切だと思った。友だちとの関わりも3歳の時より多くなってきて、揉めることも増えるので先生が仲立ちとなり子ども同士が納得できるような解決をしなければいけないと学んだ。
- ・ホッチキス留めも、先生に持ってもらいながらできたり、テープを貼れたり出来るが増えて嬉しい中でも、「先生と一緒に」が嬉しく安心する子が多いので、まだまだ1対1でゆったりとした時間を持ちながら、スキンシップをとって関わっていくことの大切さをより感じられた。そしてそれは、4歳児だけでなく、どの年齢どの学年でも大切にしていかななくてはならないことだと思った。

- ここでの課題は、葛藤するユウタの気持ちに寄り添いながらも、保育者としてユウタの成長をどのように見守り、関わっていくかと言う点である。当初思うままに振る舞っていたユウタだが、思い通りにならないことも沢山あり、登園を渋ったり、友だちを噛んだりしている。他者の存在に気づきながら試行錯誤する時期である。そこから仲間関係が複雑になると、仲間の中でいざこざも含めてかわわりが活発になってくる。上記の学生の感想にもあるが、この時期のウルトラマンごっこの衝突のエピソードは多くの学生が印象に残ったようだ。泣いている子に理由をきくのではなく、まわりの子に「なぜ泣いていると思う?」と聞くことで、相手の気持ちを想像したり、自分の言動を振り返ったりする機会を設けることや、保育者がそれぞれの子どもの代弁者になることの大切さに気づいて記述していた。また、他者の存在に気づき、他者との関係のなかで自己形成が芽生え、葛藤しながら自己実現に向かっていく過程をエピソードを通して学ぶことが出来た。

DVD「3年間の保育記録」からは、4歳児になったリョウガ君だが、個人として充実した園生活を送れるようになっているが、集団で行動することを拒否しているかのような振る舞いに、実習を経験した学生たちは「こんな子がいた」と実感しながらみていた。保育者の働きかけや様々なきっかけを通じて集団での行動、遊びに向かっていく経過は、学生たちの心を捉えたようで、上記の学生の感想にもあるように、保育者の関わり方の工夫や援助の仕方、その子を否定せず尊重すること、スキンシップの大切さ等多くを書き入れていた。

4. 5歳児の事例、教科書「5歳児 園生活の充実感を支えるもの」では、園生活の「充実感を味わう」とはどのような姿をさすのか、5歳児のアキラが夢中になれる遊びを見つけ、友だちとのかかわりを深めていく姿を通して、学修していく。

また、DVD「3年間の保育記録」からは、5歳児になったリョウガ君の卒園までの生活が映し出されている。そこには、ごっこ遊びを通し、イメージを共有し伝え合って遊ぶ姿や、体で表現したり話し合ったりする協同性の姿も見られる。保育者の援助の仕方や育ちあう5歳児の生活を探っていく。

教科書の事例 Lecture8 アキラの充実感を支えるもの

学生の学びの記述

- ・子どもが園に通って過ごす様子や葛藤がエピソードを通してわかりやすく書かれていた。子どもたちは色々な楽しみを知りながら、1人だったのが多人数になり、ぶつかったり悩んだり、たくさん経験しながら大きくなっていくのだと改めて感じた。その楽しみや悩みを友だち、子ども同士だけではなく、保育者と一緒に経験することで、子ども達のことよくわかるようになるし、信頼関係を築いていけるんだと思う。
- ・5歳になって友だちと学びあう姿がとても印象的で、そこに至るまでに次々とあった子どもの中の葛藤や苦しみを乗り越えることが出来たことで、友だちと関わりあうことができるのだと学んだ。そのために先生は環境を設定し、声をかけ子どもの心に寄り添い、支えていくのだと学んだ。子ども同士関わる姿の仲立ちをすることも必要だとは思いますが、子どもから引き出し、見守る事も大切で関わっていくポイントが難しいと思う。
- ・アキラが夢中になる遊びを見つけることによって、できなかった事、できない気持ちを外に表すことができ、自己主張だけではなく、相手の主張を認めたり受け入れたりする姿にかわり、素直な気持ちを言葉にして伝えるところが本当にかわいく心に残った。

DVD「3年間の保育記録」5歳児のリョウガ君が協同性のある遊びを展開する場面から

学生の学びの記述

- ・5歳児になったリョウガ君のDVDを見て、3歳、4歳の頃のリョウガ君と比べて、とても内面的にも、考え方関わり方にも大きく成長したと感じた。その成長があったのも、保育者との関係であったり、影ながらの援助があったからだと思ふことが出来た。だからこそ、個々の関わりは大切で、リョウガ君が友だちと関われるようになるまできっかけ作りを行っていた保育者の姿は見習うべき点であると思った。
- ・発表会の準備をしていたところで、友だちと意見を出し合ったり、自分で考えて物を作っていた所が心に残った。過去に友だちと意見のぶつかり合いをしていた経験があったからこそ、「ああしよう、こうしよう」と友だちと話し合いみんなでより良いものにしようと協力する姿があったと思う。子どもにとって喧嘩は良い経験なんだと改めて学んだ。

学生の学びの記述

- ・探検隊には何が必要だろうと問いかけ、子どもの話を聞きつつそれを実物化するためのヒントを出して、子どもたちの力で作り出そうとするかかわりや声かけをリアルに見ることができて良かった。牛乳パック1本で、帽子が作れるのはびっくりでしっかり覚えておこうと思った。恐竜の羽を動かそうと子どもたちが作っているのには驚いた。その時の先生はあくまで手助けの位置で援助していた。難しいことをしていても、最初から手助けせず、〇〇したいなら、〇〇してみる? など声をかけて促したり、名前をつけて愛着が持てるようにしている所が印象的だった。
- ・女の先生であっても、男の先生であっても、大きな心で受け止め一緒に遊び、経験することで遊びを伸ばすのだと思った。このDVDでの、生活発表会の様子もたくさんの工夫が見られ勉強になった。涙が出てしまう時も、「眠い」と言って目をこすることで、あきらめるのではなく、がまんをし、活動に参加していくという成長にも感動した。

- ここでの課題は、「個の育ちと共同性の育ち」に気づくことである。「幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう」というねらいは、「個の育ち」にかかわるものだが、その充実感は一では得ることができない。つねに「身近な人と親しみ、かかわりを深める」なかで味わえるものである。「個の育ち」と「共同性の育ち」は、からみ合いながら育っていくものである。岡本(1994)は「生活の充実感を支えるもの」として、「自分を理解してくれる人」が自分にはいてくれるという実感、自分のあり方や行動が自分一人のなかで終わらずに「他者につながっている」という実感、「自分が成長していつている」という実感、自分なりに熱中できること、自分のやるべきことがあるということ、自分の行為や生活に「誇り」をもてることを挙げている。これらのことは、今の学生においても問い直せる基本的なことであろう。学生自身の生活を見つめなおし「充実感」について考えてみた。そこから、アキラが夢中になれる遊びを見つけて、友だちと共通の目的を持って遊びを発展させていくエピソードを分析していった。学生たちの多くが、子どもたちはぶつかったり悩んだり葛藤など、たくさん経験しながら大きくなっていくのだと改めて感じた書き込んでいた。

DVD「3年間の保育記録」からは、5歳児になったリョウガ君の卒園までの姿が映し出されている。4歳児の時のような葛藤が少なくなり、顔つきも幼かった雰囲気や脱却している。協同性や仲間意識の芽生えを強く感じる場面から、リョウガ君の5歳児での育ちを感じることができる。ここではリョウガ君が、子ども同士でかかわり合い、協同して1つのことをやり遂げていく体験が記録されている。揺れ動く心の葛藤を乗り越えながら、彼なりの自己表現ができるようになり、興味や関心を持ったことを友だちと一緒に追求しながら関係を深め、彼の世界を広げている。保育者は、子どもたちの興味を生かした活動の場を工夫し、友達と話し合ったり一緒に表現したりする機会を作り、それらをつなげて運動会や子ども会で発表するという保育を展開している。

子どもたちがめあてを共有し、長い時間をかけて協力して作り上げていく園行事は、映像を通して学生たちにしっかり伝わり、育ち合い学び合う5歳児の生活を時間をかけて話し合うことができた。学生も、感動や驚き、改めて学んだことや今までの積み重ねの大切さ等、詳細に書いており学生たちの素直な感動が伝わってきた。リョウガ君の成長とともに学生たちも視野を広げ、学びあうことができた取り組みであった。

5. 今後に向けて

保育内容「人間関係」の授業では、それぞれが学んできた多種多様の保育内容と方法を共有し、子どもたちが「人との関わりの中でどのように育っていくのか」ということに対し理解を深め、「人と関わる保育という仕事の魅力」を再確認していきたいと考え進めてきた。そのための方法として、保育者に必要な「観察力」「考察力」を向上させるために、学生たちに、子どもたちが様々な人との関係を通して成長していく事例やDVDから、つながりによって生きる力を得ている子どもの姿や、その時の保育者の援助や行動について話し合い、学んだことを記述していくことで確かなものにし、現場に出た時に保育者として学び続けられる力を身につけさせたいと考えた。

改めて学生たちの記録を精査すると、学生たちが、常に、子どもの姿を「見る」事を確実にに行い、その奥にある思いや考えを理解し、保育者がそれをどのように「感じ」どのように捉えるかということ、年齢別に事例やDVDから繰り返しやっていくことで、この「観察力」と「考察力」が向上していくのではないかということが示唆された。

しかし、その一方で、授業の中で意図しているねらいや課題が、学生には十分伝わらず、イメージできないまま話し合うことで、話の内容が偏っていたり、一方的であったり、深まらなかったということもあった。そのため、記述においても書ける内容が少なかったり、課題から少しずれた形で書いてしまったりしている姿も見られた。

今後は、取り上げた課題を繰り返しやりつつも、どのような揭示の仕方をしていくと、より多くの学生たちに効果的なのか焦点を当てて、考えていきたい。また、学生たちが体験してきた実習のなかでの「人間関係」の事例を具体的に取り上げる時間的余裕がなかったのも残念である。以上のことを踏まえ、次回への実践に備えたいと考えている。

子ども学科・准教授

【引用文献・参考文献】

- 1) 田宮縁「体験する・調べる・考える 領域 人間関係」
- 2) 小田豊・神長美津子・赤石元子(監修・解説)(2005) DVD 文部科学省特別選定 3年間の保育記録 「3歳児前半・後半 4歳児 5歳児」 企画・制作 岩波映像株式会社
- 3) Dalrymple 規子(2017) 保育内容研究「人間関係」の指導法に関する一考察 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究第2巻 97-104
- 4) 山崎篤・吉川寿美・笠原正洋(2017) 子どもの人間関係をとらえるモデルを短大生の保育内容「人間関係」の授業に導入した教育実践報告 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第49
- 5) 菜原桂子(2016) 多様な保育内容と方法の理解を深める授業実践 人間関係から学び続ける保育者の養成を目指して 北翔大学短期大学部研究紀要 第54号